



TITLE:

中国貴州省ミャオ族における民族  
衣装がつなぐ母娘関係の動態  
ー女性のライフコースと社会経済  
的变化に着目してー(Abstract\_要  
旨)

AUTHOR(S):

佐藤, 若菜

---

CITATION:

佐藤, 若菜. 中国貴州省ミャオ族における民族衣装がつなぐ母娘関係の  
動態 ー女性のライフコースと社会経済的变化に着目してー. 京都大  
学, 2016, 博士(地域研究)

ISSUE DATE:

2016-01-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19416>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 『文化人類学』に掲載された論  
文等の著者は、自らの名において論集・著作集を印刷媒体で作成する  
とき、それが掲載された『文化人類学』の版面をそのまま使用するの  
でない限り、その論文等を日本文化人類学会の許諾なしに転載するこ  
とができる。ただし、この場合、著者は前記印刷媒体の中で出典を明  
らかにすることを要するものとする。

( 続紙 1 )

京都大学	博士（地域研究）	氏名	佐藤 若菜
論文題目	中国貴州省ミャオ族における民族衣装がつなぐ母娘関係の動態 ー女性のライフコースと社会経済的変化に着目してー		
(論文内容の要旨)			
<p>本博士論文は、中国貴州省に暮らすミャオ族の民族衣装と母娘関係を研究対象とし、社会経済的変容を反映した衣装と女性たちのライフコースの変化を通じて、その製作から着用、保管、譲渡に至るまでの過程で母娘関係がいかに再編されるのかという問いを、モノと人、社会の相互構築的関係から捉えるものである。1950 年代からの農業生産組織の変革と、1980 年代からの綿布・絹糸等の市場流通を経て豪華になったミャオ族の民族衣装は、持参財や礼服として、母娘関係だけでなく実家・婚家間や社会的階層間の関係、民族間関係など、調査地 S 村の多様な社会関係に組み込まれている。本論文は、1949 年の新中国成立以降、ミャオ族女性と衣装が相互に媒介しあいながら社会関係を生み出してきた過程を、アクター・ネットワーク論の知見を活用しつつ現地の社会経済史を背景とした衣装のやりとりと微細な日常実践の記述を通して民族誌的に描き出している。このミクロな人と衣装の民族誌を通して、価値や位置づけが更新される関係的なモノとしての衣装がミャオ族の母娘関係の動態を生み出していることを明らかにする。</p> <p>第 1 章「序論」では、中国共産党の少数民族政策の下、「ミャオ族」が多様な民族集団を内包する形で識別されたことが、ミャオ族服飾研究の発展に大きく影響を与えた点を指摘する。先行研究としてミャオ族服飾研究においては、衣装は芸術品として、また、記号や象徴として捉えられ、衣装の形式や装飾が何を意味し、表象するのかといったある種の暗号解読を通していわば静的に分析されてきた。衣装が表象する意味への関心が先行する中で、ミャオ族の日常生活や社会関係における衣装の位置づけは等閑に付されてきたのである。本論文では、モノのマテリアリティと歴史的価値の変遷やアクター・ネットワークの視点を採用しつつ、ミャオ族女性がモノを介して社会関係を形成する過程に注目することを述べる。</p> <p>一方で、近年の中国語圏に見られる新たな親子研究では、これまで人類学の対象として取り上げられることが少なかった実母と婚出した娘との関係を、日常実践を通して明らかにする分析の枠組が検討されている。これらの研究を踏まえて、父系的親族組織によって特徴づけられるミャオ族社会において、社会経済的変容を背景にモノと母娘との関係を検討する意義を提示する。同時に、1990 年代以降の新たな親族研究のうち、モノと親子関係に焦点をあてた研究では、身体的なつながりを形成するサブスタンスや人格を構成する要素としてのモノが注目されてきた。衣装もまたサブスタンスに還元されうる側面を有しながらも、とりわけ 1990 年代以降に見られるミャオ族の母娘関係には、人格や身体を構成する要素としての衣装というよりは、むしろ衣装の製作と所有を巡るミャオ族の論理が組み込まれており、そういった関係を考察する枠組みを提示する。</p> <p>第 2 章「民族衣装のマテリアリティ」では、民族衣装の種類と製作工程を概観し、衣装は異なる技術によってつくられたパーツを複雑に縫い合わせることで完成することを示す。このマテリアリティを反映して、各パーツは手作りされるものと、市場等で購入されるものに分化したことで、一着の衣装の製作にはより多くの女性が関与するようになった。ミャオ族女性は、染色と刺繍の工程だけは手作りすることにこだわり続けてきたのだが、なかでも刺繍の製作者</p>			

が衣装全体の製作者として判別されるようになったことを指摘する。

第3章「ミャオ族女性の婚姻とその変容」では、1978年の改革・開放政策以降、婚姻法が少数民族にも適用され、また義務教育と出稼ぎが女性のライフコースに組み込まれるようになったことにより、ミャオ族の社会的階層に基づく配偶者選択や結婚後の実家・婚家間の移動が一部変化したことを示す。と同時に、母娘間では現金を獲得する能力や、衣装製作技術の習得程度において差異が生じ、また理想とする結婚も食い違うようになったことで、刺繍の習熟度による「賢さ」を軸とした「嫁／妻」基準をめぐって齟齬が頻発するようになった。衣装は、母と娘をつなぐだけでなく、引き離す要因にもなっていたのである。

第4章「農村部における民族衣装の価値のたかまりと財としての位置づけ」では、母娘関係において重視される衣装の価値がいかに変遷してきたのかを、民国後期以降の調査地における社会経済史とともに検討する。調査時、持参財や礼服として重宝されていた装飾性の豊かな盛装は、以前は地主のみが所有しえたものであり、1950年代の地主制度の解体とそののちの綿布や絹糸をはじめとした材料の市場流通化、さらに出稼ぎによる現金収入の上昇を経て、ミャオ族女性全体に普及していった。これにより、調査時には、婚家で執り行われる婚礼において新婦が着用する分を大きく上回る着数の衣装が実家から運ばれ、これらを通して新婦とその実母、ひいては実家の社会的・経済的威信が示されていた。また、一部では現地の細分化された「民族」カテゴリーを明示する礼服や、換金可能な商品としても扱われていた。総じて、調査時の衣装は貴重な財としてやりとりされていたのである。

第5章「衣装と婚姻の変化による母娘関係の再編」では、1990年代以降に見られる婚出した娘の衣装を実母が保管する営みを、ここまで述べてきた衣装のマテリアリティと製作者の判別（第2章）、女性のライフコースの変化（第3章）、そして衣装価値の上昇（第4章）を踏まえて考察する。この衣装保管の事例には、財としての衣装と娘／嫁をめぐる実家・婚家間の交渉が関わっていた。同時に、母親によって娘のために作られた衣装だけは、母親のものとも娘のものともなりうるような新たな衣装所有の形態を生み出していたことを指摘する。さらに、この所有形態は、既婚女性が実家から婚家へ移住する時機がより早まっていることを反映して、実母から娘への段階的な衣装譲渡と母娘間の長期的な離別の過程を内包しているとみなすことができる。

第6章「結論」では、モノのマテリアリティや価値、ミャオ族女性のライフコースを捉える微視的な分析と、社会経済的変容を捉える巨視的俯瞰を組み合わせることから、モノと人、社会が織り込まれた縫い目のない布地として母娘関係を捉えてきた本論文全体の論点を総括する。そこから、ミャオ族と衣装のつながりが更新され続ける関係的な衣装のあり方を指摘するとともに、この人とモノを巻き込みながら重層的に形成される母娘関係を、長期的な変遷のプロセスとして明らかにする視座を提示する。

(論文審査の結果の要旨)

本博士論文は、中国貴州省に暮らすミャオ族の民族衣装と母娘関係について、地域の社会経済的変容と、それに伴う衣装の技術継承や価値の変遷の両側面から分析している。それにより、特に改革・開放政策以降の女性のライフコースの変化を描き出している。そして、民族衣装の製作・着用・保管・譲渡に至る過程を通じて、父系社会における母娘関係がどのように再編されるかを、ラトゥールのアクター・ネットワーク論や、ミンツの砂糖をめぐる社会史的分析の手法を参考に、モノと人、社会の相互構築的關係から動態的にとらえている。近年、文化人類学においてモノや技術の研究が盛んに行われている。本論文は民族衣装と女性をめぐる、マクロな社会経済史の流れを捉え、ミクロな女性のライフコースと母娘関係の変化を民族誌的に描き、モノと社会関係の動態分析をもってこれに貢献している。

中国少数民族地域は、外国人の長期滞在型の調査が困難であった時期が長く、その研究も民族政策と分類、民族の文化表象とアイデンティティといった限られたテーマに集中してきた。少数民族の衣装もそうした中で、民族の表象としての側面が強調されてきたのだが、中でも注目を浴びてきたミャオ族の衣装については、型の分類や、モチーフの象徴分析、民族表象としての衣装と観光に関する議論が中心であった。社会経済史的な視点や日常生活の社会関係の中で民族衣装をとらえる視点はこれまでほとんどみられなかったのである。男女の領域や役割分担が明確なミャオ族社会にあって、女性の生活領域に立ち立った研究自体が稀であり、本論文は、女性による長期調査の利点も十分に生かし、女性たちの生活とその長期的な変遷のなかで、民族衣装の製作・着用から保管・譲渡までの過程が、その価値とともにどのように変化してきたかを論じている。また、日中関係が悪化する中で、時には調査地への入村を禁じられながら、粘り強く実施した少数民族地域での調査にもとづく貴重な成果である。一方、親族・親子関係の研究では、父系社会における母娘関係への着目が近年では少しずつ試みられているが、その中でも、民族衣装というモノを介した母娘関係の再編の動態を詳細に分析する本論文のオリジナリティは、特筆すべきである。

本論文は、以下の4つの学術的貢献によって評価することができる。第一に、非常に複雑なミャオ族の民族衣装そのものの物質的構成を、技術と製作過程から詳細に説き明かすことで、筆者がマテリアリティと称する、ミャオ族民族衣装のモノとしての特質とその変遷を、如実にとらえることに成功している。それにより、製作過程は多様な技術的工程の複合であり、その分業自体が変遷を遂げていること、変動著しい女性たちのライフコースにあって、そうした多様な工程のなかでも、刺繍という特定の技術が重要性を増していることが浮き彫りにされた。

第二に、モノの価値やモノが社会関係をいかに再編し形成するかを、時間的深度をもって社会経済的な変遷の中で捉えている。現地の社会経済的な変動とともに、民族衣装の社会的価値や所有分布、着用の種別や広がりをつかめることにより、民族衣装が日常着ではなく、儀礼などで着用するものとなり、それが幅広い社会階層に普及しながらも、貴重財として保管されるものとなってきたことを明らかにしている。より大きな歴史的な階層変動

の中で衣装の分布や変化をとらえることにより、本論文は、民族衣装からみた中国少数民族社会の社会経済史にもなっている。

第三に、これまで中国少数民族の衣装は、着用・製作する人々と必ずしもかかわりのない分類や、象徴性、表象性に注目が集まっていたのに対し、初めて日常生活のなかで民族衣装をとらえている。技術を継承し、製作し、保存し、着用する人々の日常の社会関係のなかで、アクター・ネットワーク論を引用し、民族衣装と人々の社会関係の形成とを動的にとらえることに成功している。民族衣装の製作・保管過程を、婚姻をめぐる実践の変化と関連づけることで、同地域の女性のライフコースの動態を捉え、特に、教育の普及や出稼ぎの増加による婚姻形態の変化が、民族衣装の製作と技術継承、所有者と保管場所に影響をもたらしていることを詳細な事例を示しつつ描いている。また、社会生活を描写する中で、少数民族社会の階層意識、自他意識、蠱毒や釀鬼などのつきものに類する慣習の相関関係をも浮き彫りにしている。民族衣装への着目を通じて、社会的階層や民族間関係を考慮した、少数民族社会の民族誌・女性の生活史を描き出しているのである。

第四に、父系的な親族組織によって特徴づけられるミャオ族社会にあって、民族衣装がどのように母娘関係を取り結んでいるか、また女性のライフコースが変容し、衣装をめぐって母娘関係がどのように再編されているかを捉えることで、親族論・親子関係の議論にも貢献している。

これらの点を総じて、本論文は、民族衣装と母娘関係を軸に、中国少数民族社会の動態を描き出し、民族衣装の製作・着用・保管過程の変容を生活のただなかで分析することで、女性の生活史、地域の社会経済史、父系社会における母娘関係に言及し、文化人類学や地域研究のなかでもモノ研究や親族研究に貢献する優れた論文である。

よって本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年10月6日、論文の内容とそれに関連した事項について試問をおこなった結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。